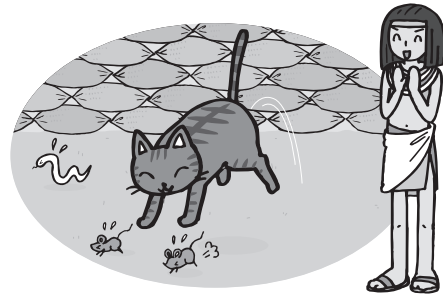




地域ねこ計画:ねこの歴史

その昔から、ねこは外来種動物?



現代の家ねこの起源は、人を頼って生きる習性のリビアヤマネコといわれています。人の立ち入らない山や里で、補食しながら生き続ける「野生動物」ではなかったのです。

ねことネズミは、人のそばにいと食べ物があって暮らしやすいので、自らすすんで人のそばにやってきました。

穀物倉庫のネズミやヘビをねこが退治するので、人々はねこを飼いならし家畜にしました。

古代エジプトのねこは、女神としても崇拜され、密かに海外に売られたので世界中に拡がります。

近代の大きな社会問題になっている、移入・外来種動物や、生物多様性と環境保全の関係に似ています。

エジプトからタイ、中国をたどり、6世紀の朝鮮半島でも「仏典をかじるネズミ防除」のため、既にねこのペット化が始まっていました。

経典などをネズミの害から守るため、同じ頃には、やはりネズミ退治の目的で日本に渡ったといわれます。

このときの尾のまっすぐなねこは京都に多く、また「尾曲がりねこ」はマレーシア、インドネシアを経て交易船とともに江戸時代に日本に渡り長崎に多くいたようです。

ヨーロッパでは14世紀に魔女狩りが始まり、ねこをたくさん殺しましたので、ペストが大流行し約2500万人が死にました。

日本でペストが大流行した明治時代には、ペスト菌を運ぶネズミ退治の目的で、一家に一匹、ねこを飼うことが奨励されました。

ネズミの捕獲には懸賞金が付けられます。ペスト撲滅のため、ネズミとりの上手なねこを輸入して繁殖もします。良いねこを作るため、ねこの品評会も開かれます。

ねこはネズミの天敵で、ペストのネズミを食べても病気にかかりません。ねこを飼っている町ほどペスト患者が少ないという事も分かりました。

その後、東南アジアなどからの輸入も拡がり、日本各地で飼いねこが増え続けます。

大正時代にペストの大流行が無くなったので、ネズミの天敵だったねこもいらなくなります。飼い主の手から放されるねこの増えたことを、容易に想像できます。

「ねこがいるとネズミがない」という歴史の中で、人の役に立ち、人のために働くねこは飼いならされましたが、やがて人に見捨てられ、野良ねこと名付けられたねこたちも生き続けることになります。

